

「命の上手な歩き方」

TAKAMI LYCHEE

## 【人物関係表】

※登場人物の説明を入力してください。

人物の名前（年齢・職業・主人公との関係性・性格など）

●北島ハジメ（きたしま はじめ）本作主人公  
三十五歳 独身 サラリーマン  
性格 真面目で面倒見が良く理性が効くタイプ  
プ 理数系の冷静さを持つ 人への共感において  
は鈍い部分がある

●藤村マモル（ふじむら まもる）  
三十五歳 独身 自営業 ハジメの接触事故  
の相手  
性格 欲深く情動的なタイプ すぐにカッとなるが情に厚いところもあるため人から好かれる  
父親の代から中華料理屋を営んでいる  
関西出身なため関西弁

●近藤裕子（こんどう ゆうこ）  
三十歳 独身 OL ハジメの恋人  
性格 温厚で控えめ 自己主張が少ないが芯  
のしっかりした女性 子供好き

図書館司書をしている

≪ハジメが命の小旅行中に会おう人たち≫

●橋本アツム（はしもと あつむ）

十九歳 大学生

□死因 急性アルコール中毒

性格 大人しく人に流されやすいタイプ 存在感が薄く、その他大勢になりがちなことを恥じている ぶっきらぼう  
好きな女の子に告白するつもりだった日の前夜に参加した飲み会で倒れる

●幸田ハナ（こうだ はな）

六十七歳

□死因 階段から転落

性格 プライドが高くブランド好き

三代から続いている開業医の家系で育ったお嬢さんという肩書に誇りを持っている

雨の日に自宅の外階段で、落ちたブローチを拾おうとして転落

● 福留コウキ(ふくとめ こうき)

八歳 小学生

□ 死因 水難事故

性格 人見知りが激しく用心深い 頭脳明晰  
で落ち着いている

夏休みに友人家族に連れられて行った川釣りで溺れて亡くなる 母親を恋しくおもっている

● 内田アキ(うちだ あき)

二十九歳 主婦

□ 死因 自殺

性格 気が弱く内気なタイプ 自分に自信がなく人の顔色や反応を気にしすぎる  
夫の浮気が発覚した日の夜、自ら自殺をはかる 子供に恵まれず夫婦仲が冷えていき、そのことで悩んでいた時、夫の浮気が発覚

● 藤島サダユキ(ふじしま さだゆき)

二十三歳 キャバクラの呼び込み

□死因 喧嘩

性格 気が強い 派手好き 要領が良く女好き

ハヅキの彼氏

女性を商品としか思っておらず、生前は女性問題で度々揉め事を起こしていた

●栗生ハヅキ(くりうはづき)

二十四歳 キャバクラ嬢

□死因 喧嘩

性格 気が強い 派手好き 独占欲が強い

サダユキの彼女

サダユキの女癖の悪さが原因で喧嘩し、口論となりもつれあいの喧嘩へと発展し死亡

○会社のオフィスでひとり残業をするハジメ

(夜)

ハジメ「んっ……はぁ……」

ハジメ、大きく伸びおして溜息をつく

ハジメM「結局終わらなかった。持って帰っ

てやるしかないか」

ハジメ、パソコンを閉じる

○オフィスを出て繁華街を歩くハジメの全体

画

○ネオンが煌々と光り、楽し気に笑う酔っ払  
いたちの画

○ハジメ、暗い顔で繁華街の様子を眺める

ハジメM「この中に……来月、いや、来年、

死んでるヤツとかいるのかな……」

○飲食店から出て来る老若男女の画

ハジメM「いや、そんな簡単に人って死ぬわ

けねえよな……」

○ハジメのポケットでバイブするスマホ

ハジメM「早く帰って資料仕上げないと」

ハジメ、足早に街中を歩きすぎる

○白い壁に囲まれた部屋(昼)

ハジメ、ベッドの上で目覚める。瞬きを  
をし、目をしばたかせる。

ハジメ「…ん…痛…」

体の節々が痛いといった感じで顔をし  
かめる

ハジメM「ここは…どこだ？はっ！俺、仕  
事……って……え？」

辺りを見渡す

ハジメM「見たこともない部屋だ…俺の部  
屋じゃない…しかも何もない」  
白い壁に囲まれた何もない部屋にひと  
っだけある木の扉を見つける

ハジメ「扉がひとつだけ…俺、なんでこん  
なところで眠ってたんだ…？」

怪訝そうな顔で考え込む

ハジメM「病院ってわけでもなさそうだし」  
天井を見上げる。白い天井は一面に広  
がっている

ハジメM「それにしても体中が痛い…一体

俺の知らないところで何が……」

ハッと何かを思い出したように顔を上げ  
げる

× × ×

へフラッシュバック

通勤途中、交差点を曲がろうとしたと  
ころで原付バイクと接触

ハジメ「うわっ……！」

バイク横転、ハジメ飛ばされガードレ  
ールで頭を打って意識不明  
サイレンの音が鳴り響く

× × ×

○ 同

ハジメ M 「俺……そうか……原付とぶつかっ  
たんだ。ってことは……死んだんだ  
な、俺……」

左右の手のひらをじつと見つめる

ぎゅっと左右共に拳を握る

ハジメ「ま、仕方ないか……それが俺の人生  
だったってことだよな」

大きく溜息をつき、扉を見つめる

ハジメ M 「死んだと分かったからにはこんな

とこでずっと寝てたって仕方ない

し、外出てみるか……」

ベッドから起き出し、扉の方へゆっく

りと進む

ハジメ M 「この扉の向こうにあるのは……も

しかしたら……」

ドアノブを握りゆっくりと回す 扉が

ゆっくりと開き真っ白の光が差す

ハジメ 「うっ……まぶし……」

目をつぶり顔をしかめる

### ○銀杏並木(昼)

ゆっくりと歩き出す

ハジメ M 「あの世ってやっぱり綺麗なところ

なんだな……風も吹いてる」

銀杏のはが風で揺れる

ハジメ M 「へえ……なんだか、まるで外国に

来たような感じだ」

足元に散らばる落ち葉を見つめる

ハジメ M 「まあ、どうせ死んでるわけだし時

間も会社も、もう何も気にしなく

ていいんだ。天国までの道のり、

散歩でもするか」

周囲を見渡し行く方向に目星をつける

ハジメ 「こっちの方に行ってみるか……開け

てそうだし」

角を曲がる

○石畳の銀杏並木 異国情緒のある建物が並

ぶ(昼)

ハジメ M 「喫茶店か……？」

ガラス越しに建物の中をうかがう 人

影を見つける

内側から扉が開き、中から内田アキが

出て来る

アキ 「あ、お客さん？あなた、お客さんです

か？」

アキ、ハジメに詰め寄る

ハジメ「は、はい！？俺は……えっと……」

アキ「ああ、ごめんなさいね。私、内田アキです。ここで喫茶店してるの。お客さんあまり来ないから、嬉しくて。あ、来ないって言っても、常連さんは何人かいるんだけどね」

ハジメ「はあ……常連……」

ハジメM「常連ってことは、死人が何人もいるってことか……それはそれでなんと  
いうか」

ハジメ、考え込む

アキ「どうかしました？」

アキ、不思議そうにハジメを見つめる

ハジメ「あ、いえ。俺は北島ハジメと  
いま  
す」

ハジメ、軽く頭を下げる

アキ「ハジメ君ね。よろしく。ここでウロウロしていたってことはそんな急いでないでしょ？入って行ってよ。ね？」

○アキの喫茶店

アキ、ハジメを店の中へ通す

アキ「さ、そこに座って、少し待っててね」

ハジメ、カウンターの真ん中に腰掛ける。

アキ「はい、これメニュー。何か食べる？」

アキ、メニューをハジメの前に置く

ハジメ「食べ物もあるんですか……」

ハジメ、メニューに目を落とす

アキ「うん、軽食だけだね」

アキ、やかんに水を入れコンロでわか

しはじめる。

ハジメ「えっと……じゃあ、コーヒーとサン

ドイッチを」

アキ「はい。かしこまりました」

ハジメ、店内を眺める

鳩時計が十三時を告げる

ハジメM「シックな店内だな……生きてた頃

はこういう喫茶店なんて入ったこ

ともなかったな」

× × ×

へフラッシュバック

生前のハジメ、牛井屋、立ち食い蕎麦  
を食べる様子

× × ×

○同

ハジメM「俺、サラリーマンしてたんだった。

毎日営業の外回りであくせく働い

て……」

アキ「お待たせしました。コーヒーとハムサ  
ンドです」

アキ、ハジメの前にサンドイッチとコ  
ーヒーの乗った銀トレイを置く

アキ「マヨネーズ薄めに塗ってあるから味頼  
りなかったらお塩使ってね」

アキ、カウンター上の塩を指す

ハジメ「あ、はい。どうも……」

ハジメ、サンドイッチに目を落とす

ハジメ「うまそうだ」

アキ「え？あはは、そう？食事は久しぶりで

「しよ？」

ハジメ「はい、多分……」

ハジメ、サンドイッチを口に運ぶ

アキ「多分？ふうん……そっか」

アキ、何か考えた表情で宙を見る

アキ「で、ハジメ君はなんで死んじゃったの？」

アキ、満面の笑顔

ハジメ「ぶっ……」

ハジメ、驚いてふきだしそうになる

アキ「あら、あら、もう慌てて食べるから」

アキ、半笑いでハジメを見ている

ハジメ「いや、なんか……すげえことを普通

に聞くから……どっから来たの？

くらいの感じで」

アキ「あら、だって此処にいるってことはそ

ういうことでしょう？」

ハジメM「そうか……ってことはアキさんも

……死んでるんだよな」

アキ「なになに？わたしがなんで死んだか聞

きたいって？」

アキ、にやりと含み笑い

ハジメ「あ、いや、その……」

アキ「自殺。自分で自分を殺しちゃったの」

ハジメ、ハッとアキを見つめる

アキ、クスッと笑う

アキ「私、結婚してただけど、旦那とうま  
くいなくなっちゃて。子どもがなか  
なかできなくて悩んでた時に、旦那が  
女を作ってたって知っちゃって」

ハジメ「そうだったんですか……」

アキ「でも、今はこれで良かったって思っ  
てるの。だって此処、けっこう居心地い  
いのよ。成仏するほど未練が無いわけ  
でもないし」

ハジメ「成仏……」

アキ「ハジメ君もそうなんじゃないの？」

ハジメ「俺は……気が付いたら白い部屋にい  
て、それで自分が死んだってことを  
思い出して……で、とりあえず外歩  
いてみようと思っていたところ、ア

キさんと出会ったって感じで」

アキ「そうなんだあ。ってことは、成仏の仕方知らないの？」

ハジメ「成仏の仕方？ここが極楽か何かなのかと……」

アキ「違う違う！ココはそんないもんじゃないわよ。ここは、まあ言ってみればパーキングエリアってとこかな」

ハジメ「パーキングエリア……ですか？」

アキ「成仏するには、此処から先の大きな白い門をくぐる必要があるらしいわ」

ハジメ「門？」

アキ「ええ。私も人から聞いた話だから、本当のところは分からないんだけどね」

アキ、カウンターの向こうでコーヒーを瓶にうつす

アキ「で？ハジメ君はなんで死んじゃったの？」

ハジメ「あ、俺は、通勤途中に原付と接触して」

アキ「ふうん……エリートか」

アキ、意味深な感じで相槌

ハジメ「はい？エリート？」

ハジメ、サンドイッチを呑み込む

アキ「うん、こちら辺じゃハジメ君みたいに

事故で亡くなった人のことエリートっ

ていつてるよ？みんな三者三葉の死に

方するからねえ」

ハジメ「そう言えばさつき常連さんがいるっ

て言っていましたよね」

アキ「うんうん。そうね。いるわよ、そのう

ち来るんじゃないかしら」

扉が開く音 「カラン」

○幸田ハナ、店の入り口に立つ

ハナ「お邪魔します」

アキ「あ、ハナさんいらっしやい」

ハナ「あら、見ないお顔」

ハナ、ハジメを見て目を丸くする

アキ「はい、そうなんですよ。さつきそこで

出会って、うちに引き入れちゃいまし

た」

ハナ「あら、そうなの。お若いわねお兄さん。

御幾つ？」

○ハナとハジメ横並び

ハナ、ハジメの隣に腰かける

ハジメ「えっと、三十五です。享年？って言

うんですかね……」

アキ「え？ハジメ君、私より年上なんだ？て

つきり年下かと思ってたわ」

アキ、驚いて身を乗り出す

ハジメ「あはは……俺、童顔なんで年下に見

られやすくて」

ハジメ、コーヒーをすすする

ハナ「ハジメ君ていうのね。私は幸田ハナ、

よろしくどうぞ」

アキ「ハナさんが一番古株なのよ。ね？」

アキ、ハナに笑いかける

ハナ「ふふっ。まあね。何か知りたいことが

あったら何でもお聞きなさい」

ハジメ、ハナの指にはめられたダイヤ

の指輪を見る

ハジメ「ハナさんは、亡くなってもう随分と

経つんですか？」

ハナ「んふふ、そうねえ、もう七年？になる

かしらねえ」

アキ、ハナの前にカフェオレを出す

アキ「ハナさんが来たばかりの頃もこの喫茶

店は営業してたんですよね？」

ハナ「そうね。先代って言うていいのかしら。

その人の淹れるカフェオレが好きだっ

たのよね」

ハナ、カフェオレカップに両手を添え

る

ハジメ「その人は今？」

ハナ「成仏したわよ、二年前にね」

アキ「そこへ私が来たってわけ」

アキ、肩をすくめてハジメに笑いかけ

る

アキ「ハジメ君は、交通事故でここへ来たの

よね？」

ハナ「あら。エリート」

ハナ、口に手を当てる

ハジメ「ハナさんはどうして？」

ハナ「うふふ、私はねえ……コレ」

ハナ、胸元のブローチを見せる

ハナ「雨の日にね……このブローチを取ろう

として……」

× × ×

へフラッシュバックへ

洋館づくりの家の外階段で足を滑らせ

るハナ

ハナ「きゃっ……！」

転げ落ちるハナ

× × ×

○同

ハジメ「大切なものなんですね、そのブロー

チ」

ハナ「ええ。それはもう。私は代々続く医者

の家系でね。生まれ故郷では私たちの

ことを知らない人はいないってくらい

に有名でね。父も祖父も内科医で。兄と弟も同じく。私はそんな家庭で、それはそれは大事に育てられたのよ。箱入りとはまさにこのことね。

このブローチはそんな父が母にプレゼントしたものを、私が受け継いだのよ」

ハナ、誇らしげにブローチを触る

アキ、ハナを見つめ、ハジメに目配せ

扉が開く音 カラン

○橋本アツム登場 扉のところに立つアツム

アツム「ちーす……あ、え？へえ」

アツム、ハジメを見る

アツム「新人さんじゃん」

アツム カウンター近くの二人掛け席に

腰を下ろす

○テーブルのアツム、カウンター側のハジメ達

アキ「そうよ。ハジメ君よ。ハジメ君、彼は

橋本アツム君。学生さんよ、あ、元、

ね」

○アツムのアツプ

アツム、煙草に火をつける

○アキの正面顔

アキ「アツム君、今日は何にする？」

○アキとアツムの席が共に入る画

アツム「えーっと……あー、じゃあ、俺もサ

ンドイッチ。あと、レモンスカッシュ」

○サンドイッチの皿のアツプ

アツム、ハジメのサンドイッチの皿を

見る

○ハジメ、アツムの方に座ったまま向き直る

ハジメ「アツム君、よろしくね。俺、北島ハ

ジメです」

アツム「どうも。で、何で死んだの？」

アキ「ふふ、みんなそこが気になるよねえ」

アキ、グラスに水を注ぎながら笑う

ハジメ「あ、交通事故です」

アツム「へえ。そうなんだ。え、どんな感じ？」

ハジメ「うーん」、通勤途中で、角から曲がっ

てきた原付と接触、ですかね」

アツム「ふうん。痛そう……」

ハナ「ほんと、聞いてるだけで身の毛がよだ

つわねえ」

アツム「いやいや、婆さんだって十分痛いっ

しよ。階段から落ちたんだし」

ハジメ、鼻で笑う

○ハナの顔のアップ

ハナ、むっとした顔になる

○アキとアツムがうつる画

アキ「アツム君」

アキ、アツムに目配せ

○ハジメとアツムがうつる画

ハジメ「アツム君は、どうして？」

アツム「ああ、俺？急性アルコール中毒」

アツム、煙草をほとんど吸わず灰皿に

こすりつけて消す

ハジメ「はあ……」

ハジメ、深く頷く

アツム「大学の飲み会で、まあ、周りに乗せ

られて？それで、一気に……気付い

たらココ。マジだるい」

× × ×

へフラッシュバック

大学生A「いき、いき、いき！」

大学生B「いき、いき、いき、いえーい！」

大学生C「さすが、アツム！」

アツム、ジョッキを一气飲み

アツム「うっ……」

アツム、苦しそうな顔

サイレンのなる音

× × ×

○同

アツム「あーあ、俺まだ十九だよ？」

○四者がうつる画

ハナ「自業自得ね」

アツム「はっ？ なんだよ、ババア。もっぺん言

ってみるよ？」

アツム、体を取り出して怒る

アキ「はい、もう終わり！ アツム君落ち着い

て。ハナさんも、ね？」

ハナ「もう帰ります。気分悪いったらないわ」

ハナ、席を立ち鼻息荒く出て行く

アキ、ハナの後ろ姿を見送る

○アキの全体像

アキ「はあ。アツム君、あんな言い方しちや

ダメじゃないの。もう…：毎度毎度」

アキ、あきれ顔で首を横に振る

○ハジメの全体像

ハジメ「毎度…：？」

○三者がうつる画

アキ「ハナさんとこの子、犬猿の仲なの。い

つも一触即発なんだから」

アキ、ハジメに向かってアツムを見ながら肩をすくめる

アツム「いや、あの婆さんがつかかってく

んじゃん。プライドばかり高いみ

つともねえ意地悪ばーさんがよお」

アツム、誰とも目を合わさず顔をしかめる

アキ「いちいち相手の言葉に反応するから余

計に腹が立つのよ。賢くおなりなさい」

アキ、グラスを拭きながら

ハジメ「こっちでも人間関係ってあるんすね」

ハジメ、苦笑い

○アキのアップ

アキ「ねえ。死んだあとも人は人との縁を切れないのねえ。でも、生きてる頃に知ってたら、もう少し死ぬのが楽しみになったかも知れないけど」

○アツムのアップ

アツム「いや、アキ姉、ばりばり自殺じゃん。

別に死ぬの怖くなかったんだろ、そこまで」

○三者がうつる画

アキ「うるさい。人の死因いじるんじゃない

わよ」

ハジメ「あのお、ここでは皆さんどんな感じ

で……」

○アツム、アキがうつる画

アツム「ん？」

アキ「どんな感じって？」

アツムとアキ、目を丸くしてハジメを見つめる

○ハジメの顔アップ

ハジメ「いや、あの……生活というか、なんていうか」

○アキとアツムの画

アキ「ああ、え、そんなの、ねえ？」

アキ、アツムに同意を求める

アツム「うん。一緒だよ？あっちでもこっちでも」

アツム、サンドイッチの最後の一切れを口に運ぶ

○ハジメのアップ

ハジメ「あっちでも、こっちでも……ですか」

ハジメ、ポカンとした表情

○三者のうつる画

アツム「アキ姉、俺そろそろ行くわ。御馳走さま」

アツム、席を立って扉の方へ向かう

アキ「あーい。行ってらっしゃい」

アキ、アツムを見送る

○アキとハジメの画

アキ「あの子、今から、あれだよ。あの一、

講習」

○アキの手元アップ 皿を引き上げる

アキ、アツムの食べた皿を引き上げる

○ハジメの背中越しにカウンターに立つアキ

ハジメ「講習？なんですか、それ？」

アキ「ええ！知らないの、ハジメ君」

アキ、驚いてハジメを見入る

○ハジメのアップ

ハジメ「え、はい。何のことだか」

○アキからみたハジメの様子画

アキ「あ、なるほどね。そっか、そこからか」

アキ、悟ったように頷く

○アキの顔のアップ

アキ「あのね、ここに留まりたい場合、申請

を出す必要があるのね」

○ハジメの背中越しのアキ

ハジメ「申請？」

アキ「うん、その先の役所みたいところで」

○ハジメとアキの画

ハジメ「へえ……こつちにもそんなところが  
あるんですか」

アキ「そうなの。そこで一旦、仮申請を出して、書類審査が通れば講習を受けるの。  
で受領されたら留まってオツケーってなるの」

ハジメ「ほう……」

ハジメ、考え込む

ハジメ「あ、ちなみに、仮申請に通らない人  
っているんですか？」

アキ「いるいる。犯罪者」

アキ、カウンター越しにコーヒーを飲む

ハジメ「ああ、そっか。なるほど」

アキ「まあ、私も若干危なかったんだけどね」

ハジメ「え、そうなんですか？」

アキ「なんかねえ、自殺は、命を粗末にした

的な感じで減点対象みたいなんだよね」

アキ、2、3回頷く

アキ「ハジメ君は大丈夫じゃないかな？ エリ

ートだし」

ハジメ「うう」

ハジメ、眉間に皺を寄せる

× × ×

（フラッシュバック1）

大学四年のハジメの友人とのやりとり

○学食で向かい合って話す三人

友人A「マジでラッキーだったわ。親父のコ

ネが使えて」

友人B「ずりい…：俺なんてメガバンク漏れ

て、信用金庫だっていうのに」

友人A「働くところあるだけまだましだろ、な、

ハジメ」

ハジメ「え？あ、うん」

ハジメ、ハッと我に返る

友人B「ハジメはいいのかよ、第3希望のと

こだろ？それならいっそ、大学院でも

行ってさ、んで2年後にもつかい第一希望のどこチャレンジとかでもありなんじゃないの？」

ハジメ「ああ……いやあ……うーん」

友人A「とは言え、院に上がっても、だよな

あ」

へフラッシュバック2へ

○ハジメ、スマホで母親と会話中

母親声「あ、ハジメ？うん、そっちはどう？」

ハジメ「うん、変わらないよ。父さんは？」

母親声「ううん、畑でこけてからどうも調子

悪いわね」

ハジメ「病院には行ってるの？」

母親声「うん、浩司叔父さんの車に乗せても

ろてね。行ってる。それより、あんた

大学は？もうすぐ卒業やね」

ハジメ「うん」

母親声「四年なってあつという間よね。卒業

したらすぐ奨学金の返還も始まる

んでしょ？しっかりせんとね」

ハジメ「分かっているよ。あのさ……」

母親声「うん？なん？あんた、お金の要る話

はやめてよ？あんた、ただでさえお

父さんでお金かかることになったん

だから」

ハジメ「うん、そんなんじゃないよ。えっと、

あ、また電話する。じゃ」

電話を切るハジメ

× × ×

○アキの店のカウンター席に座るハジメ

ハジメ「はあ……」

ハジメ、溜息を吐く

○アキとハジメのうつる画

アキ「行ってみたら？」

ハジメ「え？」

アキ「申請所」

ハジメ「ああ、はい」

アキ「申請せずにここに居られる時間も限ら

れてるし」

ハジメ「ですよね」

アキ「うん、んで気が乗らないなら成仏しち

やいなよ」

ハジメ「軽……」

○アキの笑顔のアップ

アキ「あはは、まあねえ。生き死になんて軽  
くいこーよ」

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「じゃあ、行ってきます」

アキ「うん、行ってらっしゃい。あ、その

角曲がったらすぐだから」

○ハジメ、喫茶店の外に出たところ

ハジメ「こっちか……」

ハジメ、店を出て左に続く道を見る

○ハジメ、道なりに歩いている画

ハジメ「へえ……本当に普通の街なんだ」

○雑居ビルが立ち並ぶ画

ハジメ「なんとなく来たことある感じ、これ  
が既視感とかいうヤツなのか」

ハジメ、きよろきよろしながら歩く

○曲がり角に差し掛かる画

ハジメ「あ、アキさんが言ってた曲がり角つてこれのことか、ってことは……」

○申請所の建物の画

ハジメ「ああ、ここか……思ってたより、ずつと綺麗だけど……でも」

○犬のペロ（雑種犬）登場

ペロ、ハジメの足元に走り寄る

ハジメ「え！？う、うわ、うそ……犬！」

ハジメ、驚いて大きく仰け反る

○福留コウキ登場

コウキ「あ、もう、ペロ！ダメだろ、離れち

や！もう！搜したんだぞ」

コウキ、ペロを見つけ走り寄る

○ハジメとコウキの画

ハジメ「ぼ、僕の犬なの？」

コウキ「ハイ。あ、僕、福留コウキです。こ

いつはペロ。お兄さんもこの建物に？」

ハジメ「あ、俺は北島ハジメです。よろしくね。うん、今からこの申請所に入る

ところだったんだ。コウキ君もかな？」

コウキ「ハイ。ここで申請すれば色々と福利的な援助が受けられると聞いて」

ハジメ「ふ、福利ね。うん、そうだね。そういうことになるんだよね」

コウキ「失礼ですが、お兄さんはどうして亡くなったんですか？」

ハジメ「あ、俺は交通事故で死んじゃったんだ。聞いてもいいかな？コウキはどうして？」

コウキ「僕は水難事故ですね。夏休みに入ってから友人家族に釣りキャンプに連れて行ってもらったんですけど、そこで、コイツが溺れて……で、助けようとして僕も溺れたんです」

コウキ、ペロを撫でる

ハジメ「そっか。それは大変だったね」

コウキ「お兄さんこそ、交通事故に遭われたんでしょ、痛かったでしょう？」

ハジメ「それが、一瞬のことではほとんど覚え

てないんだよね。はは」

コウキ「そっか。痛くなかったなら良かった」

ハジメ「ありがとう。中、入ろっか」

コウキ「ハイ」

○建物の中へ入っていく二人の画

コウキ「結構、冷房効いてますね」

コウキ、ペロを抱えて撫でながら

○ハジメのアップ

ハジメ「本当だねえ。なんだか死んでるのか

生きてるのか分からなくなるよ」

○コウキのアップ

コウキ「え？そうですか？僕は明らかに死ん

でいるんだなという実感しかあり

ませんけど」

○ハジメ、コウキを見下ろす画

ハジメ「ええ！？そうなの？」

○コウキのアップ

コウキ「はい。だって、お腹は空かない、喉

も乾かない、排尿排便をもよおさな

い。これだけ生理的欲求が湧いてこないとなると、死んでいるとしか

○ハジメのアップ

ハジメ「はっ！なるほど……」

ハジメ納得したようにうなづく

○建物の奥の部屋の前に辿り着くハジメとコウキの画

ハジメ「あ、ここだね。申請受付」

○申請受付の看板を見るふたりの画

コウキ「ハイ、そのようです。あ、でも……」

コウキ、険しい表情で看板を見つめる

○ハジメ、コウキを見下ろして様子を窺う

ハジメ「ん？どうした、コウキ君？」

○コウキ、ハジメを見上げる

コウキ「いやあ……ペロ、どうなるのかなっ

て思っ

て」  
コウキ、ペロをじっと抱えて心配そう

な顔

○ハジメとコウキの全体画

ハジメ「とりあえず、ペロ連れて行ってみよ」

コウキ「うん」

○受付の前に立つハジメとコウキの画

ハジメ「すみません」

○係員のアップ

係員頭を上げてふたりの方を見る

係員A「申請希望の方ですか？」

○ハジメとコウキの画

ハジメ「はい、内一匹犬もいまして……」

ハジメ、ペロを見る

○係員のアップ

係員A「ああ、動物連れの方ひとり、ですね。

ではこの書類に目を通していただ

いて、問題なければ記入事項の欄に

記入をお願いします」

係員、ふたりに書類の束を渡す

係員A「あ、その机で書いていただいて」

係員、後ろの机を指さす

○ハジメとコウキの画

ハジメ、後ろを振り返る

ハジメ「はいー」

ハジメとコウキ、軽く会釈をする

○机の前に並ぶふたりの画

ハジメ「色々、ややこしそうだね」

ハジメ、小声でコウキに耳打ち

コウキ「ハイ、でも犬オツケーだったのは助かりました」

ハジメ「だね」

書類に目を通すふたりの画

○手元の書類のアップ

ハジメ「えーっと……審査を受ける皆様……

仮申請提出より約3日程で結果が

出ます。その間のお問合せには応

じません……なお、審査に落ちた方

は、案内所にて次の行先をお伝えし

ますのでお集りください。」

コウキ「申請より5年間の滞留許可が下りま

す。それ以降の滞留をご希望の際は

再び審査を受けていただきます」

○顔を見合わせるハジメとコウキ

ハジメ「なんか……」

コウキ「かなり事務的ですね」

○手元の書類アップ

ハジメ「なお、一度申請を出されますと取り

消し等は出来かねますのでご注意

ください。」

○ハジメ、コウキの方を見る

ハジメ「コウキ君は申請出すんだよね？」

○コウキ、ハジメを見上げる画

コウキ「そうですね。僕はまだ成仏は考えて

いないので。ハジメさんは迷ってい

るんですか？申請。」

○ハジメのアップ

ハジメ「うーん、迷ってるってほどでもない

んだけどね。なんだか、死んだ後も

生きてた頃の世界とさほど変わり

ないみたいだから、それなら成仏し

てもいいのかな、って思ったりもし

て」

○ふたりの横並び全体の画

コウキ「なるほど。その考え方も一理ありま

すね。結局、人の世は人の世、です  
ね。あ、でも……こっちの人の意見  
をうのみにはしない方が良さそう  
です。」

コウキ、ハジメをじっと見つめる

ハジメ「ん？どういう意味？」

コウキ「いや、なんとなく。言っても、こっ  
ちの人はもう完全にこの世界に染まっ  
た人たちなわけで……なんかちよつと  
怖いんですよね」

ハジメ「なるほど。用心にこしたことはない  
ね」

コウキ「とりあえず、この書類を持ってどこ  
かで休憩しませんか？ここ、ずっと  
やってるみたいですし。この規約の  
一番下に、亡くなってから1カ月間  
は申請猶予があるみたいですから。  
ハジメさんも亡くなってまだ間も  
ないですよね？」

コウキ、書類の該当箇所を指で示す

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「あ、本当だ。俺はまだ死んで数日。

コウキ君は？」

○コウキ、ハジメを見上げる画

コウキ「僕は1週間ほどが経ってますが、そ

れならばふたりとも別条ありません

んね」

ハジメ「そっか。そうだね。じゃあさ、さっ

き偶然にも知り合いになった人の

お店に行こうか。喫茶店なんだけど、

居心地がいいところなんだ」

コウキ「ハイ」

○アキの店の扉の前に立つハジメとコウキ

ハジメ「ここだよ。さ、コウキ君、中へ」

ハジメ、コウキを中へ促し扉を押す

○店内の全体の画 カウンターの奥に立つア

キの画

アキ「あら、ハジメ君、もう帰って来たの？

ん？あらあ……小さなお客様もいっし

よに」

○ハジメとコウキの画

ハジメ「あ、はい。申請所の前でばったり出

会って。ね？コウキ君」

○コウキ手前メインにうしろにハジメが入る

画

コウキ「ハイ。僕は福留コウキです。」

○アキの全体図

アキ「初めまして、私は内田アキっていうの。

よろしくね、コウキ君。さあ、ふたり

とも座って、座って。コウキ君、何か

食べる？」

○テーブルに並ぶコーラフロートとコーヒー

の画

○カウンターに並んで座るコウキとハジメ

の画

コウキ「アキさんは、ここでどれくらいにな

るんですか？」

○アキの上半身画

アキ「私はまだ年二年よ。2回目の申請更新

もまだなの。コウキ君もハジメ君も、

成仏よりこっちに残ること選んだんだ  
ね」

○ハジメとコウキとアキの三人画

コウキ「ハイ。僕もペロもまだいっしょに居  
たくて。でも成仏しちゃうと離れ離  
れになっちゃいそうだから」

○ペロ、床で眠る画

○アキ、ペロに視線を落とす

アキ「なるほど、コウキ君、ペロのこと大事  
にしてるんだね。でも、ワンコなのに  
溺れたんだ……ペロ」

○ハジメ、ぎよつとした顔

ハジメ「ちよっ！それは……！」

○下を向くコウキの画

コウキ「ハイ……そうなんですよ……ペロ、  
そもそも犬なんで、泳げるはずなの  
に。なのにコイツ、あの日川で溺れ  
たんです……」

○項垂れるコウキを見つめるアキ

○コウキ、ハッと何かを思い出した顔

コウキ「違います…：溺れたのはペロじゃありません。僕です。僕が溺れたんです…：あの日」

× × ×

へフラッシュバック

○川ではしゃぐコウキと友人の画

コウキ「ははは、冷たいっ！気持ちいい！な、

ペロ」

友人A「あ、コーくん！足元、滑るよ！」

○コウキの足元、小岩の上で足が滑る画

コウキ「う、うわああっ！」

ペロ「ワンワンッ！ワン！」

× × ×

○コウキの顔のアップ画

コウキ「あの日、ペロが僕を助けるために川

に飛び込んだ…：」

○アキとハジメの顔を見合わせる画

コウキ「僕が…：」

○コウキの顔のアップ

コウキ「僕がペロの寿命を奪っちゃったんだ

としたらさ、此処にペロを引き留めておくなんてことしちやダメかも  
知れないですよね」

○戸惑うアキとハジメの画

ハジメ「コウキ君……」

ハジメ、心配そうにコウキを見つめる

○コーラフロートのバニラアイスがコーラに  
溶けている様子

○コウキの上半身のアップ

コウキ「ハジメさん、すみません。僕、ペロ  
と一緒に成仏しようと思います」

○アキ、コウキ、ハジメの三人画

アキ「うん、そっかあ。いいのね？」

○コウキのアップ

コウキ「ハイ。ペロを成仏させてやりたいで  
す」

コウキ、納得したように微笑む

○アキの全体画

アキ「よし！そうと決まったら、たくさん食  
べていきなさい！」

○コウキとハジメの並ぶ画

ハジメ「そうだね！コウキ君、アキさんの手

料理すごく美味いから、食べて行こ

う！」

コウキ「ハイ。じゃあ、僕、オムライスが食

べたいです」

○アキとコウキとハジメの三人画

アキ「よかったです！」

アキ、腰に手を当て大きく頷く

○アキの店を出た所(夕方) アキ、ふたりに  
見送る画

アキ「コウキ君、出会えてよかったわ。気を

付けてね」

コウキ「ハイ。御馳走様でした。アキさんも、

ハジメさんもどうかお元気で」

コウキ、ペロを抱っこして軽く会釈

ハジメ「コウキ君、気を付けて。ペロも」

ハジメ、ペロの頭を撫でる

コウキ「では、これで」

コウキ、歩き出す

○コウキの後ろ姿を見つめるハジメとアキ

○アキ、店の中に入る　ハジメも後ろに続く

○藤村マモル登場　アキの店の前を通り過ぎる

○マモルとすれ違うハジメの画

○アキの店内の画　アキ、カウンター内へ

ハジメ、カウンター席の前に立つ

アキ「で、ハジメ君はどうするの？」

ハジメ「俺は、申請書にサインして提出しようかと思ってます」

○アキの後ろ姿画

アキ「おお、じゃ今後ともよろしくね。住むところあるの？」

○アキの方を向いているハジメの全体図

ハジメ「え、あ、イヤ……考えてなかったです」

○ハジメの方を振り向くアキ、向かい合うハジメの画

アキ「そうなの？じゃ、この店の3階の部屋が空いてるから、使う？住むところを

幹旋してくれるところもあるんだけど、  
仮申請が下りるまではどこも貸してく  
れないのよ」

ハジメ「助かります。ありがとうございます」

アキ「でもどちらにしても申請さつさと済ま

せちゃいなさいよ？早く仲間が欲しい

し。あ、そうだ、コレ持っていきなよ」

○ハジメ、不思議そうに首をかしげる画

○アキの店を出るハジメの画　ドアが閉まる

音と共に（夕方）

ハジメM「死んでもこんなふうに普通に生活

してる感じなんだな……」

ハジメ、自分の手のひらを見つめる

ハジメM「死んだなんて嘘みたいだな……俺

……本当にもう……」

× × ×

へフラッシュユバック

○カフェで向かい合って話すふたり（昼）

裕子「ねえ、ハジメ君、来週の土曜日あたり

にどうかな？」

裕子、遠慮がちに言葉を慎重に選ぶ

ハジメ「ああ、うん、そうだなあ。近いうち

にとは俺も思ってるからさ。タイミ

ング考えるよ」

ハジメ、コーヒーをすする

○裕子、自分の指をいじる

○裕子の顔のアップ

裕子「だね。じゃあ、またお母さんとお父さ

んにご挨拶出来るの、たのしみにして

るね。」

裕子、悲しげに笑う

○裕子の上半身画

裕子「あ、じゃあ、私そろそろ行くね」

裕子、席を立つ

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「あ……」

ハジメ、裕子に何かを言おうとするが

言えない

○裕子、小さく手を振り遠ざかる画

○ハジメ、裕子の背中を見つめる画

ハジメ「あ……ゴメン、裕子……」

ハジメ、小声で呟く

× × ×

○申請所までの道のりを歩くハジメの画

ハジメM「裕子……どうしてるんだろ」

ハジメ、足を止めて考える

○ハジメの横顔の画

ハジメM「俺、裕子とちゃんと話出来てなか

ったんだったな」

○ハジメの険しい表情

ハジメM「ずっと避けてたんだよな。煩わし

いこと、全部。というか、煩わ

しいと思ひ込んでたんだよな、

自分で勝手に」

× × ×

へフラッシュバック

○裕子の寂しそうに笑う顔のアップ画

× × ×

○ハジメの横顔のアップ画

ハジメM「あの裕子の顔……」

○申請所の入り口前に辿り着くハジメの画

ハジメ「着いた……はあ……」

ハジメ、溜息を吐く

○ハジメ、中へ入ろうとする足元の画

○中から男女の大声が響き渡る

ハヅキ「なんなのよ！もとはといえば、アン

タが悪いんでしょうが！脳みそ下

半身にもってかれたようなクソ男が！」

サダユキ「はあ？テメエがヒステリックだから

悪いんだろうが！？このクソ

女！」

○中をそっと覗き込むハジメの画

○ハヅキとサダユキの言い合う様子の全体画

ハヅキ「は？アンタがうちの店の子に手え出

したんじゃない！」

サダユキ「お前はいちいちうっせえんだよ！

誰と何処にいんのとか、こいつ誰

とか。もううんざりだったんだ

よ！」

ハヅキ「あんたが疑い持たれるようなことば

つかするからでしょ？しかも同じ

店の子に手え出すとか、ほんとない

わ

○ハジメ、ハヅキとサダユキの横をそつと通り過ぎる

○ハジメ、待合ソファに座っているマモルの前を通りかかる

マモル「あのおふたり、かれこれ30分くらいあの調子なんすわ。なんや、男の方が浮気しとってんバレたとかで。ピルの屋上でもみくちやになって、それでふたりとも落ちて死んだんやと」

マモル、苦笑いしながらハジメを見つめる

○ハジメ、驚いてマモルの前で立ち止まる画  
ハジメ「え！？あ、はあ……」

ハジメ、ハヅキサダユキを眺める

○ソファに座るマモルの画

マモル「あ、不躰なことを言いました。すんま

せん。俺は藤村マモルいいいます。」

マモル、立ち上がって会釈をする

○ハジメとマモルの全体画

ハジメ「いえいえ、こちらこそ。俺は北島ハジメです」

マモル「へえ、お兄さんまだお若いのに」

マモル、ハジメを頭からつま先まで眺める

ハジメ「ははは、若く見られがちですけど、

俺もう三十超えてますから」

マモル「へえ。え、じゃあ俺と近いのかな？

俺は三十五なんですわ」

ハジメ「あ、じゃあ同い年ですね。」

○マモルのアップ

マモル「えっ！わあ、なんや親近感わくわ。

よろしゅう。俺のことは名前でええから」

○ハジメの表情画

ハジメ「あ、うん。じゃあ俺のことも名前で」

○ハジメとマモルの引きの画

マモル「え、じゃ今から申請すんの？」

ハジメ「うん、そうしようかなあと」

マモル「ふうん、そうか。じゃあここに残る

ってことなんやな」

ハジメ「うん。そのつもり。マモル君は？」

マモル「あぁー。俺、正直迷てんねん……」

マモル、首を軽く項垂れる

ハジメ「ん？どうして？」

○マモルの表情画

マモル「ちよつと時間ある？」

○ハジメの顔のアップ画　ハジメ首をかしげる

○ハジメとマモル、申請所近くの公園のベンチに座る画(夜)

マモル「すまん、こんなとこまで付き合う

てもろて。いや、こっち来てから

誰も話す人おらなんだから、嬉し

いわ、ほんま。ありがとうな」

ハジメ「いえ」

ハジメ、首を横に振る

マモル「聞いてへんかったけど、ハジメ君は  
何で死んだん？」

ハジメ「事故死です」

マモル「そうなんや。俺も同じや」

○マモルの横顔画

マモル「でも…俺な…人殺してんねん」

○ハジメの顔のアップ画 無言でマモルを見  
つめる

○マモルとハジメのふたり画

マモル「俺な、こんな柄の悪いゴロツキみた  
いに見えるけど、商売しててん。街  
中の小さい店で、中華料理屋。最初  
は親父の店を引き継いだだけで、や  
る気なかってんけどな、でもやって  
みると意外と性に合うてるんかな。  
楽しんできてきて。お客さんも常連さ  
んができて、可愛がってもらえるよ  
うなってる。」

× × ×

へフラッシュバックへ

○マモルの店の店内 賑わう様子

マモル「あいー。毎度。いつもありがとう」

マモル、客を見送る

○マモルの鍋を振る画

○バイトがマモルに注文w通す画

バイトA「店長、回鍋肉セット1です」

マモル「あいよー」

マモル、鍋を力強く振る

× × ×

○ハジメ、マモルの横顔を見ている画

マモル「店、ちよつとずつやけど軌道に乗っ

て、これからって思ってたんだけどな

あ

ハジメ「事故、だったんでしょう？」

ハジメ、遠慮がちに訊ねる

○マモル、ハジメの顔を見る画

マモル「うん。朝に買い出しに行く途中やっ

た。市場まで。いつもは歩いて行く

んやけど、その日は寝坊してしもて。

前の晩に、同級生らと飯食うて、ち

よっと夜更かししてしもたんや。それで原付つこたんやけど。慣れへんことはしたらあかな。角曲がるときに、人がおるの見てなかったんや。んで咄嗟にブレーキかけたけど遅かった。その相手轢いてしもた。その後、俺もバランス崩してガードレールに突っ込んだ」

× × ×

へフラッシュバック

○原付バイクが転倒し、マモルが倒れている

画 救急車のサイレン音

× × ×

○ハジメの上半身画

ハジメ「俺も、原付との事故なんです」

○ハジメの横顔を見つめるマモルの画

マモル「えっ、ハジメ君も？」

○ハジメ、真っすぐ前を向く横顔画

ハジメ「うん。俺は、轢かれた方。朝、家を

出て駅に向かう途中だった。前日の

残業でも仕事が片付かなくて、家に持ち帰って作業して、ほとんど眠らずに家を出たんだ。彼女からのメッセージに返事をするのも億劫で、職場に着いてからでいいやって思いながらボーっと歩いてた。昨晚に着信もあったけど、出られなくて。その前の週にちよつとしたことで気まづくなっちゃってたのに」

○マモルの前を向く横顔の画

マモル「死ぬときちゆうたら皮肉なもんやな。やり残しや思い残しがある時にやって来る」

マモル、クスッと笑う

○ハジメとマモルのふたり画

ハジメ「ですね。マモル君が轢いた人、どんな人だったの？」

マモル「若いサラリーマンやろな。スーツ着てはったから。錦織市場ゆう市場があるんやけど、そこに向かう途中に、

事故の多いで有名な交差点がある

ねん。そこで自分がまさか死ぬなんて思ってもなかった」

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「えっ？錦織市場……？」

○マモルの顔のアップ画

マモル「うん？うん。錦織市場や。ハジメ君

知ってんのんか？」

○ハジメ、マモルの方を見ている図

ハジメ「知ってるどころか、俺が死んだのも

その交差点ですよ……」

ハジメ、青ざめた顔でマモルを見る

○マモル、ハジメの方を見ている図

マモル「え……？ハジメ君死んだんいつや？」

○ハジメの顔アップ画

ハジメ「えっと、まだ数日前です」

○マモルの顔のアップ

マモル「嘘やろ……それ、朝の8時半くらい

か？」

○ハジメとマモルの上半身画

ハジメ「は、はい……そのくらいです」

マモル「嘘やろ、マジか……ハジメ君を轢いたバイク、多分、俺や」

ハジメ「そんな……マモル君のバイクって水色のラインが入ったやつ？」

マモル「せや。俺のバイクや……すまん……」

○ハジメの手元のアップ画 両手を組む

ハジメ「大丈夫ですよ……別に」

○マモルの顔のアップ

マモル「別にとって……はあはあ……すまん……  
……ハジメ君、ほんまにすまん。堪忍

して」

マモル、涙を目に溜めて低い声で謝る

○ハジメとマモルの表情画

ハジメ「そんな泣かないですよ。もう終わっち

やったことだし」

マモル「いや、せやけど……俺……」

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「泣いて、謝って、それで楽になろう  
としないでくれるかな」

○マモルの表情画とハジメの横顔

マモル「ハジメ君……」

マモル、頬を涙が伝いながらハジメを見つめる

マモル「お、俺は……ただただ申し訳のうて」

ハジメ「もう、戻れないんだからさ、生きて

た頃には。泣いても意味がないよ。

時間も命も戻ってこない。巻き戻せ

ないんだから。泣かれると、余計し

んどくなるから」

○ハジメの悲し気な笑顔のアップ画

ハジメ「だから、後悔するのやめようよ、マ

モル君」

○ハジメを見つめるマモルの表情画

マモル「せやな」

マモル、1度だけ頷く

○ハジメとマモルの並んで座る引き画

マモル「そやけど、ハジメ君、死んだ後もス

ーッ姿やねんなあ」

ハジメ「え？」

ハジメ、不意をつかれ目を丸くする

マモル「いや、死んだときの姿のままやろ、

それ？」

○ハジメのスーツ全体像画

○ハジメ、自分の姿を眺める画

ハジメ「ああ……そうだね。ってか、みんな

そうじゃないの？」

○マモルの全体画

マモル「いや、そうでもないで。俺は死んだ

日、店の服着とつたんやけど、ほら、

今はこれや」

マモル、自分の服を見ながら手を広げ  
る

○ハジメ、マモルを見ている画

ハジメ「へえ、なんなんだろ。その人を表す

服装でココに来るってことなのか

な」

○マモル、ハジメの方を見ている画

マモル「さあ、どうやろなあ？せやけど、死

んだときのままの恰好で、ちよつと

グロいな」

○ハジメとマモルのふたり並び画

ハジメ「おい、正直すぎるよ、それ」

ハジメ、マモルを肘で小突く

マモル「はははは！すまんすまん、着替えた  
りできたらええけどなあ」

○公園内の全体画 外灯の灯りが光る

○マモルの表情、上半身画

マモル「おっと、すまん、俺のせいでだいたい

時間経ってしもたな。ほな、申請行

こか」

○ハジメとマモルベンチから立ち上がる画

ハジメ「うっ……」

マモル「んぐっ……！

ハジメとマモル、顔を歪めて苦しむ

○ハジメとマモル、膝をついてうずくまる画

ハジメ「な、なんだ、これ……」

マモル「うっううう、苦しい……頭も……」

ハジメ「うっ、すごい吐き気……がっあっ」

ハジメ、地面に蹲りながら吐く

マモル「だ、大丈夫か……あああ！目がかす

む……」

マモル、目をかたく閉じて苦しむ

ハジメM「なんなんだこれ……吐き気、頭痛、

腹痛が一気に……」

○マモルの激しくもだえ苦しむ画

マモル「なんだこれ……生きてた頃と同じか

それ以上の……うっ、ぐっ、苦しい

……」

○ハジメのアップ画 苦しみながら何か思い

出す顔

× × ×

（フラッシュバック）

○アキ、ハジメに小さな水筒を渡す

アキ「はい、コレ」

○ハジメ、アキから渡された水筒を不思議

そうに見つめる

ハジメ「水筒？これ何……？」

○ハジメとアキの向かい合う画

アキ「持っていていきなよ。中にコーヒー入って

るよ。ま、飲もうと思った時が飲みど  
キだからね」

○アキの笑う顔のアップ

アキ「必要ないかもしれないけど、多分飲み  
たくなると思うから」

ハジメ「飲みたくなる時が来る？」

アキ「うん。生命の危機！みたいな時に飲み  
な。って言うてももう死んでんだだけ  
ね。あ、あと、絶対に飲み干すこと。  
残したり、誰かとシェアしたりしない  
でね」

アキ、悪戯な笑みをハジメに向ける

× × ×

○ハジメ、ポケットの水筒を出す

ハジメ「うっ…コレ…：飲めば…：うっ」

ハジメ、苦しそうに水筒を握る

○ハジメの目線の先にいるマモルの画

ハジメ「うっ、うぐっ…：気持ち悪…：い」

○ハジメの顔のアップ画

ハジメM「これを飲めば…：少しはましにな

るか……？」

ハジメ、水筒を見た後、マモルを見つめる

○マモル、苦しそうに悶える

マモル「うううつ、あぁっ！く、苦しい……」

○ハジメ、マモルを見つめる画

× × ×

へフラッシュバック

○生前、マモルの原付と接触する瞬間のハジ

メの画

× × ×

○ハジメ、水筒を握りしめ苦しむ

ハジメM「目の前にいるのは、俺の人生を終

わらせた張本人……こんなことつてないよな」

○マモル、地面に這いつくばって吐く

マモル「の、喉が……焼けるように……痛い」

マモル、目に涙を溜めて苦しむ

○ハジメ、水筒の蓋を開ける画

ハジメ「……はぁはぁ……うつ……」

ハジメ、息を荒げてやっこのことで蓋  
を開ける

○ハジメ、マモルを見つめる画

ハジメM「これを飲めばきつと俺はすぐに楽  
になれる……だけど……」

○ハジメ、水筒の飲み口に口をつける画

○マモルの苦しみ悶える姿が目に映るハジメ  
の画

○ハジメ、苦しそうに目を細め、飲み口から  
口を離す

ハジメ「オイ、マモル君！コレを飲め！」

ハジメ、水筒をマモルに差し出す

○マモル、苦しみながらハジメを見る画

マモル「え……なんやこれ……」

○ハジメ、苦しそうに表情を歪めながら水筒  
を差し出す画

ハジメ「いいから！コレ、飲め！楽になれる  
から」

○水筒を受け取るマモル

マモル「え、ええんか？これ、もろても？」

マモル、ハジメを見つめる

○ハジメの顔アップ画

ハジメ「ああ、いいから、飲め……うつ……」

○マモル、ハジメを気遣う表情画

マモル「うう……せ、せやけど……ハジメ君

も苦しそやないか……」

○ハジメ、マモルを険しい顔で見る画

ハジメ「いいから！飲め！早く！飲み干せ」

○マモル、ハジメの水筒を飲む

マモル「はあはあはあ……ハジメ君……これ、

すごい飲みもんや……さっきまでのあ

れがウソみたいや」

ハジメ「うう……うつ、そ、そうか……良か

った……」

ハジメ、その場で気を失う

○病院のベッドの上で目を醒ますハジメの画

(夕方)

ハジメ「ん……」

ハジメ、目をしばたかせる

○ハジメを覗き込む裕子の心配そうな顔の画

裕子「は、はじめ君！はじめ君！看護師さん

……呼んでくる！」

裕子、涙を拭きながら走って病室を出る

○医者と看護師が部屋に入って来る画

○医者と裕子、ハジメを覗き込む

医者「北島さん、きこえますか？」

裕子「はじめ君！はじめ君、分かる？」

裕子、涙が頬を伝う

○ハジメの顔のアップ

ハジメ「お、俺……」

○医者と看護師の並ぶ画

医者「北島さん、目は覚めたようですね。よかったです。まだ油断は禁物ですが、とにかく意識は戻りましたので、少しずつ回復にもっていきましょう。近藤さんでしたよね？あとでご家族にはご連絡しますが、当面のことをお話したいので、後ほど来てもらえますか？」

○医者に向き直る裕子の画

裕子「はい。分かりました」

○医者と看護師、病室から退出する画

○裕子、ハジメの手を握る画

ハジメ「裕子、俺……」

裕子「三週間、意識不明だったのよ」

ハジメ「そっか……俺、通勤途中で原付と……」

……

裕子「うん。原付バイクに乗ってた男の人も

意識不明の重体だったんだけど……」

裕子、言いにくそうに口をつぐむ

ハジメ「けど……？」

裕子「昨日の夜、亡くなっただって。看護師さ

んが言ってた」

ハジメ「そうか……」

ハジメ、窓の外に目をやる

裕子「とにかく意識が戻って本当に良かった」

○ハジメのアップ画

ハジメ「心配かけてごめん。あと……電話く

れてたろ。俺、忙しさを理由に……

裕子とのことないがしろにしてた」

○裕子の顔のアップ画

裕子「ううん。いいの。早く元気になって、

また二人でゆっくり過ごそうよ。私、

まだまだはじめ君と色んな所に行つて、

色んなものを見て、ふたりで色んな思

い出作りたいの」

○ハジメと裕子の画 手を握り合うふたり

裕子「じゃ、私、先生のところ行つて来るね。

今日は多分、そのまま帰るけど。また明

日お昼に来るね」

裕子、椅子から立ち上がる

○ハジメ、裕子を見送る画

○ハジメ、何かを考え込む画

ハジメM「俺あの時咄嗟に……マモル君に水

筒を渡したんだった」

ハジメ、俯いてくすりと嗤う

ハジメ「ははははははっ！ ざまあみる」

ハジメ、天井を見ながら嗤う

× × ×

へフラッシュバックへ

○苦しむマモルが水筒を口にする画

ハジメ M 「俺はあの時咄嗟に、あの飲み物を飲むことで、ヤツが向こうの世界に留まる、つまり完全に死人になることを予見したんだ。」

○水筒を渡す時のアキの表情画

ハジメ M 「アキさんは多分、俺が事故であつちの世界に来たって知って、魂が彷徨っている可能性を想定していたんだと思う。それで、俺に水筒の飲み物を飲ませることで完全に死人になるよう誘導しようとしてたんだ。やたら仲間を増やそうとしていたし」

○マモル、ハジメに謝罪していた時の画

ハジメ M 「だから俺は最後のチャンスに懸けた。マモル君をあの世に送って、俺だけがこつちに戻る。賭けだった。戻れる保証なんて一ミリもなかった。でも、俺は、俺の人生を

奪ったヤツから、もう一度奪い返

してやりたかった。そして……」

× × ×

○ハジメ、笑ってベッドから外を眺める

ハジメM「アイツをこの手であの世に送って

やったんだ」

○ハジメ、握りこぶしのアップ画

ハジメ「もう一度、人生を生き直すんだ俺は

今日、この瞬間から」

E  
N  
D